

長岡京左京二条四坊六・七町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京左京二条四坊六・七町跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、倉庫建設工事にともなう長岡京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

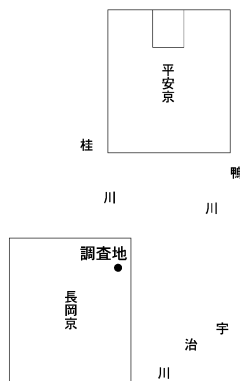
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京左京二条四坊六・七町跡
長岡京左京第 528 次調査 (7AN-VST-8 区)
- 2 調査所在地 京都市南区久世東土川町 472-1、473、474、475、476
- 3 委 託 者 舞鶴倉庫株式会社 取締役社長 田中康弘
- 4 調査期間 2008 年 8 月 5 日～ 2008 年 10 月 10 日
- 5 調査面積 1,200 m²
- 6 調査担当者 加納敬二・津々池惣一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500) 「久世」「久我」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 加納敬二・津々池惣一
- 14 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 調査時には以下の方々から御教示をいただいた。記して感謝します。(敬称略)

伊藤敦史 (京都大学文化財総合研究センター)、國下多美樹 (財団法人向日市埋蔵文化財センター)



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	6
(1) 基本層位	6
(2) 第1面 中世の遺構	6
(3) 第1面 長岡京期の遺構	6
(4) 第2面 長岡京期以前の遺構	12
4. 遺 物	13
(1) 縄文時代の遺物	13
(2) 長岡京期の遺物	15
(3) 中世の遺物	16
5. ま と め	17

図 版 目 次

図版1	遺構	第1面	中世の遺構平面図 (1:250)
図版2	遺構	第1面	長岡京期の遺構平面図 (1:250)
図版3	遺構	第2面	長岡京期以前の遺構平面図 (1:250)
図版4	遺構	1	1区第1面全景 (西から)
		2	1区二条条間大路南側溝71 (西から)
図版5	遺構	1	1区建物1A・B (北から)
		2	1区建物2 (北から)
図版6	遺構	1	2区第1面全景 (北西から)
		2	2区二条条間大路北側溝103出土木製品 (西から)
		3	同側溝103遺物出土状況 (東から)
図版7	遺構	1	1区第2面全景 (北西から)
		2	1区流路120 (北西から)

- 図版8 遺構 1 1区焼土痕 156・157・159 検出状況（北東から）
 2 2区第2面全景（西から）
- 図版9 遺物 出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：600）	2
図3	調査前全景（南から）	3
図4	調査風景（南から）	3
図5	調査区断面図（1：100）	7
図6	2区溝 103 断面図（1：40）	8
図7	1区溝 71 断面図（1：40）	8
図8	1区建物 1A 実測図（1：100）	9
図9	1区建物 1B 実測図（1：100）	10
図10	1区建物 2 実測図（1：100）	11
図11	1区土坑 153 実測図（1：40）	12
図12	1区焼土痕 156・157・159 実測図（1：40）	12
図13	1区流路 120 断面図（1：40）	13
図14	出土遺物実測図1（1：4、4のみ1：1）	14
図15	出土遺物実測図2（1：4）	15
図16	二条条間大路北側溝 103 出土木製品	16
図17	長岡京期および以前の遺構概略図（1：1,250）	18

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	5
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	13

長岡京左京二条四坊六・七町跡

1. 調査経過

調査地は、京都市南区久世東土川町の南東に所在する。長岡京の条坊では長岡京左京二条四坊六・七町に該当し、また縄文時代から古墳時代の遺跡である東土川遺跡にもあたっている。長岡京跡における調査では左京 528 次調査 (7AN-VST-8 区) となる。¹⁾ 調査地の西接地では 1993 年に (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター (以下、京都府埋文センターとする) が、名神高速道路桂川パーキングエリア建設に伴う発掘調査を実施し、長岡京廃都以降の耕作に関連する多数の耕作溝、長岡京期の条坊路である二条条間大路や東三坊大路・東四坊坊間西小路の路・側溝および町内の宅地にかかわる建物跡や井戸などの多数の遺構を検出している。さらに東土川遺跡に関連する弥生時代の墓・環壕・流路なども検出されている。²⁾

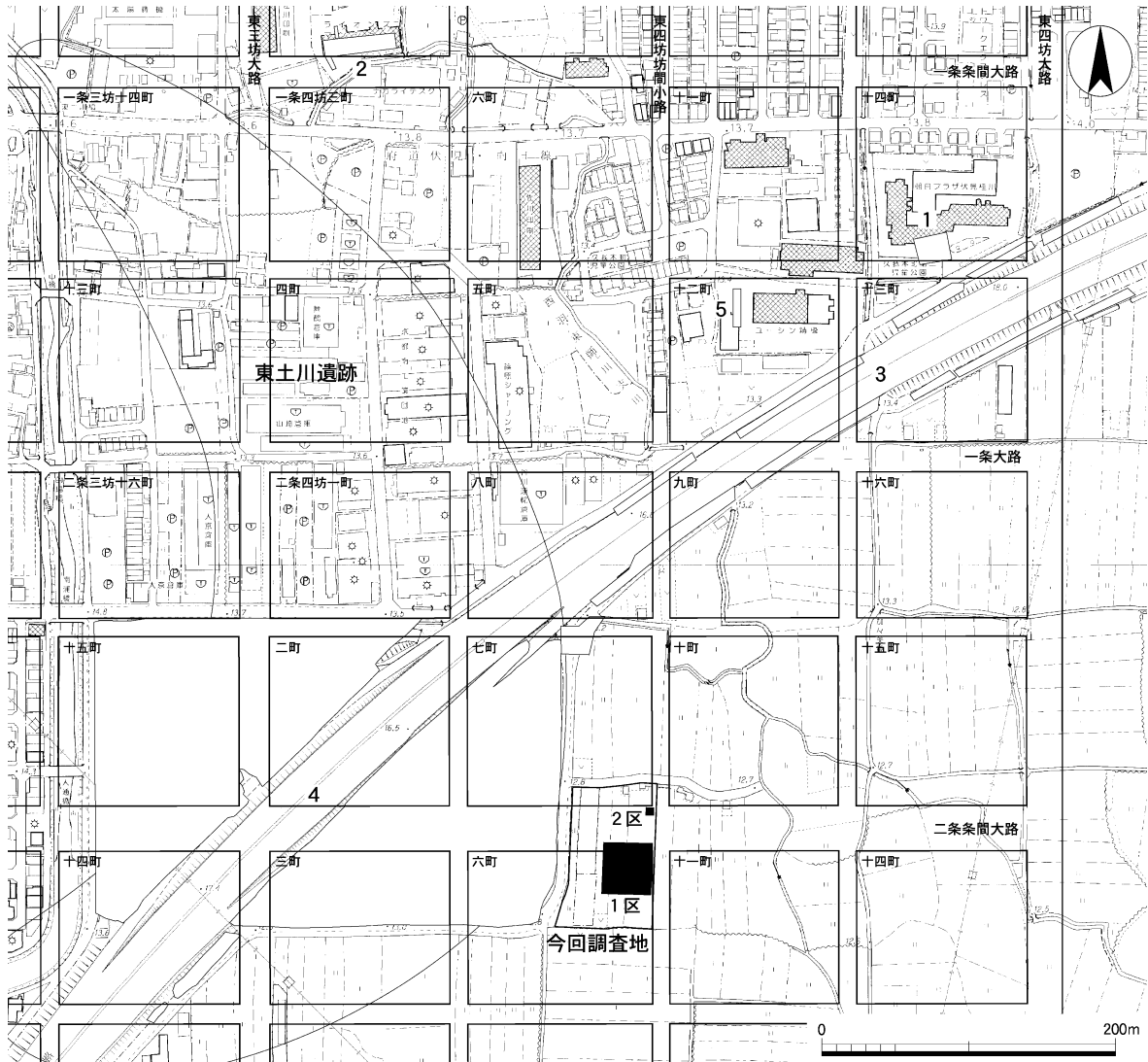


図1 調査位置図 (1 : 5,000)

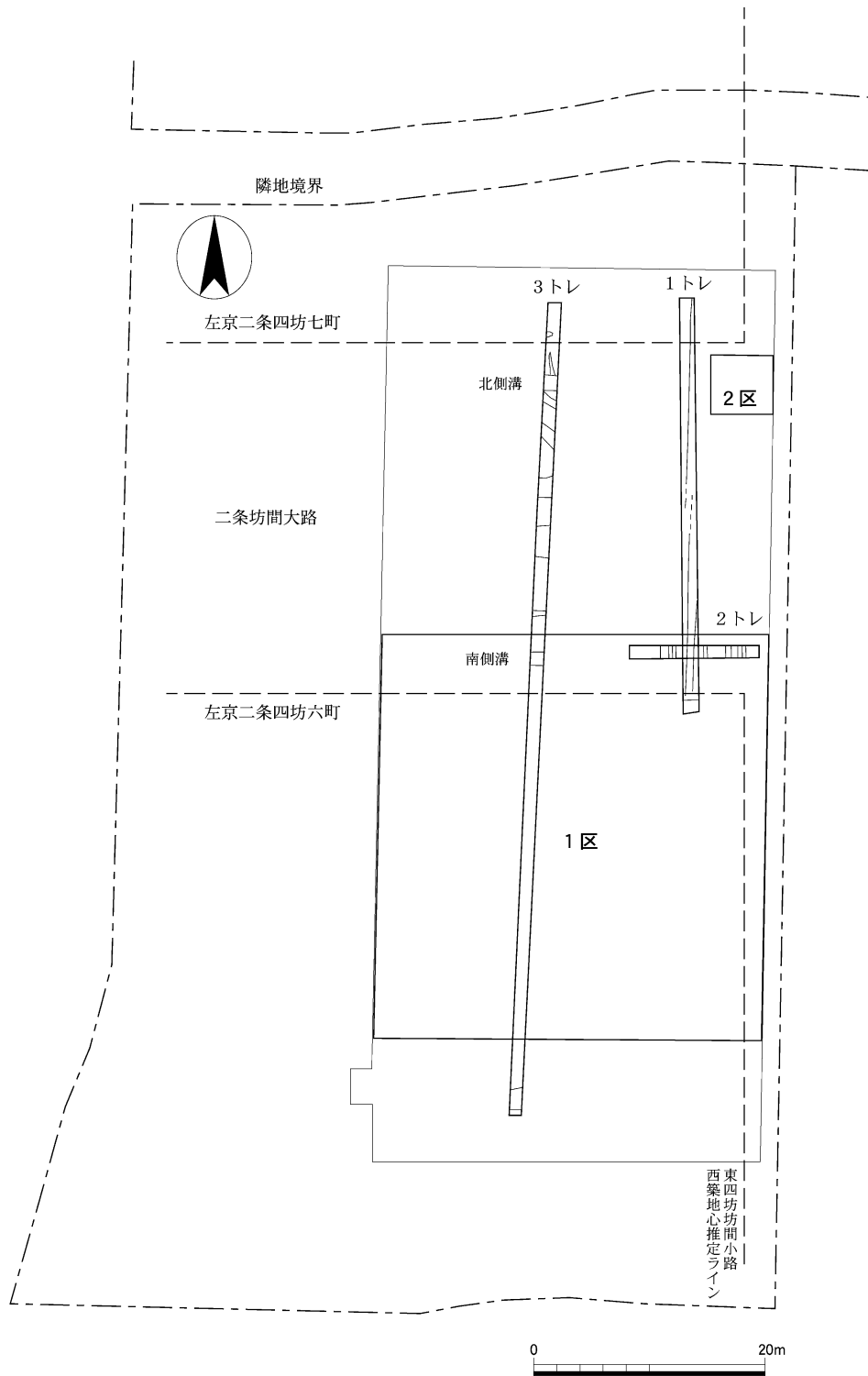


図2 調査区配置図 (1 : 600)

2008年4月、建物新築に伴い京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課とする）により遺構の有無・残存状況を確認するため、3箇所の特レンチを設定し試掘調査が実施された。その結果、二条坊間大路北・南両側溝とみられる2条の溝が検出された。両側溝の残存状況から、その延長や町内での建物・井戸など宅地の様相を解明するため、発掘調査の指導がなされた。調査は当研究所に委託され、同年8月5日から仮設事務所の設置、機材の搬



図3 調査前全景（南から）

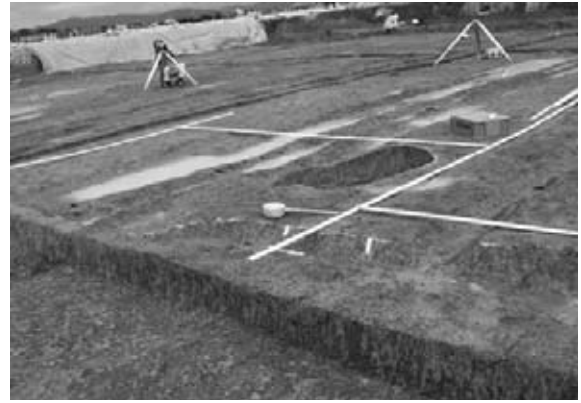


図4 調査風景（南から）

入などを行い、調査体制を整え8月11日から重機掘削を開始した。調査区は試掘調査の成果を踏まえ、敷地内に1区と2区を設定した。1区については調査区北半の東西に二条条間大路南側溝が通り、六町内の北東部にあたる。2区は二条条間大路北側溝が東西に通る。また、南北の東四坊坊間小路の築地心が両調査区の東端に推定される。調査は現代盛土、耕土、床土を重機で除去し、現地表下約1.2mの土層面で遺構検出を行った。調査の結果、中世の多数の耕作溝、また同一面で長岡京期の二条条間大路の北・南側溝、六町宅地内では建物3棟を検出した。第1面全体を0.2m程掘り下げた第2面では、1区・2区とも長岡京期以前の北西から南東方向の流路、また1区北西隅では縄文時代の焼土痕を検出している。調査においては、文化財保護課から、8月11日、8月21日、9月3日、9月26日の4回、現場指導を受けた。なお、9月13日には「関西考古学の日」に合わせて、現場公開を行い、約120名の見学者があった。

註

- 1) 長岡京跡の調査に対する調査次数は長岡京連絡協議会に拠るものである。
- 2) 『京都府遺跡調査報告書 第28冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年

2. 遺 跡

(1) 位置と環境

調査地は京都盆地南西部の乙訓地域に位置する。当地域には縄文時代から長岡京期を中心として多くの遺跡が存在する。近年は京都・大阪の近郊住宅地や工業地としての開発が急速に進み、これに伴い調査が増加し、従来の調査・研究による遺跡の範囲や性格などの再検討が必要となっている。乙訓地域は、西は丹波古成層群を基盤とする西山山地に、東を桂川に画された南北に長い地形である。中央部には北から南へ大阪層群よりなる向日丘陵が張り出し、東側には河岸段丘や扇状地が発達している。丘陵部と桂川との間には沖積平野が広がり、その中に自然堤防が点在している。当調査地は桂川右岸から約1km西、標高11.5m前後の地点に位置する。丘陵部から桂川に流れ込む中・小河川によって形成された微高地で、縁辺部には后背湿地となる低地がみられる。

自然堤防については中・近世の集落分布からも推定でき、また自然堤防の連続性から旧流路も想定が可能である。東土川遺跡では北西から南東にかけて流れる弥生時代から奈良時代の旧流路が幾筋も検出されており、その間の自然堤防上に縄文時代から中世に至る複合遺跡が立地する。その様相は名神高速道路拡幅に伴う京都府埋文センターの一連の調査や近年の宅地造成に伴う調査などでも、明らかになりつつある。

延暦三年（784）都が平城京から長岡京に遷都され、乙訓地域は長岡京域にとりこまれる。現在の行政区では京都市・向日市・長岡京市・大山崎町に広がり、宮域は向日丘陵に位置している。当調査地は長岡京の北東部、長岡宮の東、二条条間大路を挟み二条四坊六・七町の宅地にあたる。二条条間大路沿いは宮外諸司が東西に並ぶ官衙町が形成されていたことが、隣接地の京都府埋文センターの調査で判明している。1町あるいは2町規模内に、多数の建物や大型建物などが検出されている。長岡京は、わずか10年で廃都となり平安京に移るが、長岡京造営は相当以上に進行していたことが、最近の調査により急速に解明されつつある。

廃都後、平安時代から鎌倉・室町時代にかけて平安京の大消費地を支える生産地として、荘園開発が進み、寺社、貴族の荘園経営がなされる。当調査地も平安時代に施行されたとみられる条里地割を踏襲しながら、中世以降も残存して、現在に至ったとみられる。

（2）周辺の調査（図1、表1）

名神高速道路以北については近年の宅地造成などで調査例は増加しているが、以南は田・畑が多く近郊の田園地域であることから開発が数少なく、当調査地の東側周辺でも調査例は乏しい。ここでは当調査地に関連する長岡京北東部での調査例と東土川遺跡および隣接地での主要な調査例について概観しておく。

まず、京都府埋文センターが実施した当調査地の西隣接地での桂川パーキングエリア建設に伴う大規模調査4が挙げられる。長岡京跡については、左京二条三・四坊で二条条間大路が広範囲に検出され、東四坊坊間西小路まで施行されていることが明らかになった。また、町内宅地の調査では大型掘立柱建物を含む建物群や井戸などの検出から、二条条間大路沿いの北側では1町あるいは2町規模で宅地利用がなされていたことも判明している。そのことから宮城東面街区が小分割を必要としない宮外官衙を形成していたという見方が強い。東土川遺跡については弥生時代の方形周溝墓・溝や流路跡も検出し、地形に沿った北西から南東方向の流路間に挟まれた標高12m前後の自然堤防上の微高地に、墓域が営まれていたことが明らかになった。

さらに名神高速道路拡幅工事に伴う調査3では、長岡京期の建物群や、一条大路、東四坊坊間小路、東京極大路などの条坊路が検出され、長岡京の北東部での施行状況が明らかになった。東土川遺跡に関連する遺構には、縄文時代の遺構・遺物を検出している。遺構は焼土痕・土坑・小ピット列などである。いずれも縄文土器を含む遺物包含層下の地山面で検出している。縄文土器は縄文時代後期前半にあたる中津Ⅱ式から四ツ池式に属する。遺構群の性格について焼土痕や小ピット列からキャンプサイトの可能性が考えられている。また、弥生時代の流路跡も検出している。

表1 周辺の調査一覧表

番号	条坊・次数	所在地	期 間	概 要	文 献
1	左京一条四坊十六町 L197	伏見区久我本町12-12他	1988.5.11～ 6.17	長岡京期建物、柵列、溝。古墳時代溝。弥生時代方形周溝墓。	北田栄造「長岡京左京南一条四坊跡」『長岡京跡・大藪遺跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 1989年
2	左京一条四坊四町 L250	南区久世大藪町554-4他	1990.6.25～ 8.14	堀立柱建物。長岡京期～平安時代自然流路。弥生時代溝2条。	鈴木廣司「長岡京左京一条四坊・東土川遺跡」『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年
3	左京一条四坊六・十・十一・十五町 L286・304・313・317	南区久世東土川町伏見区久我本町地先	1994.4.7～ 1995.3.4	長岡京期堀立柱建物、柵列、一条大路、東四坊坊間東小路、東京極大路。弥生時代～室町時代旧羽束師川河道。弥生時代溝。縄文時代後期焼土痕、土坑群。	戸原和人他「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995年
4	左京二条三・四坊 L303・314・315・329・330・331・333・334・336・337・361・362・363・384・385・399	南区久世東土川町伏見区久我西出町	1993.5.6～ 1997.10.16	二条条間北小路、二条条間大路、東三坊大路、東四坊坊間西小路、長岡京期建物群。古墳時代溝群。弥生時代、溝、環壕、方形周溝墓。	平良泰久他「長岡京左京二条三・四坊・東土川遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第28冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
5	左京一条四坊十二町 L515	伏見区久我本町11-36、11-287	2006.9.7～ 9.20	流路2条。	丸川義広『長岡京左京一条四坊十二町』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-16 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年

いずれも遺構が立地する標高は 11 m前後の微高地である。

東土川遺跡の東隣接地では、宅地開発に伴う調査 1・5 が行われている。いずれも旧西羽束師川左岸流域に該当しており、調査 1 では弥生時代から古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物群が、調査 5 では弥生時代の流路跡 2 条が検出され、旧西羽束師川左岸域での集落跡の一端が明らかになった。

さらに東土川遺跡の北部にあたる宅地開発に伴う調査 2 では、弥生時代から平安時代の流路跡を検出している。

以上、調査地周辺の調査事例をみてきたが、安定した地盤の広がる範囲は微高地を呈し、弥生時代から古墳時代は集落跡、長岡京期では宅地としての利用が行われ、周囲には湿地や流路が広がる環境が明瞭である。また、現状からも地割りの乱れ部は旧流路の痕跡を示唆していると考えられる。今回の調査も、それらの調査や東側で営まれている田・畑での現状の地割りなどと照合することで、長岡京北東部の実態の一端、ならびに遷都前の地形環境がより詳しく理解できると考えられる。

3. 遺 構

(1) 基本層位 (図5)

調査地は北西から南東へ緩やかに傾斜しており、周辺は田・畑が広がる田園地帯である。当調査地も調査前には田・畑として利用されていた。基本層序は1区・2区ともに地表下約1.2 mまで現代盛土、耕作土、旧耕作土、床土である。現代盛土が0.8 m、耕作土・旧耕作土・床土が0.2～0.4 mの厚さである。

長岡京期および中世の遺構は、床土直下の10YR4/4 褐色砂泥層を主体とする土層の上面で検出し、この面を第1面とした。褐色砂泥層は上面に斑点状となった鉄分を多量に含む自然堆積層である。そのことから長岡京期以前の遺構については、輪郭や埋土が不明確であったことから、この褐色砂泥層を鉄分がやや少なくなる面まで掘り下げ、その上面で検出し、この面を第2面とした。なお、1区北西隅では地山直上に縄文土器を含むにぶい黄色砂泥が堆積していた。それより南にはみられず、調査区外の北へ延びる様相を呈していた。性格は不明である。

(2) 第1面 中世の遺構 (図版1・4)

耕作溝群 耕作溝は1・2区合わせて総数で70条あった。ほとんどが南北方向のもので、東西方向のものは6条とわずかである。溝は幅0.2～0.6 m、深さ0.2～0.5 mである。断面形状は逆台形状のものが多く、溝の間隔は一定ではない。埋土は2.5Y6/2 黄褐色砂泥層が主体をなす。溝の方位はいずれも座標北に対し東傾している。

(3) 第1面 長岡京期の遺構 (図版2・4)

二条条間大路北側溝103 (図6、図版6) 2区で検出した東西方向の溝である。総延長約5 m 検出した。幅1.8～2.0 m、深さ0.5～0.6 mである。溝内の堆積は大きく3層に分かれる。上から2.5Y5/1 黄灰色砂泥層、2.5Y4/1 黄灰色砂泥層、5Y4/1 灰色粘土層が堆積する。断面形状は逆台形である。東端部では、箱蓋とみられる木製品が出土し、表面には墨書がみられた。

二条条間大路南側溝71 (図7、図版4) 1区北半部で検出した東西方向の溝である。総延長約32 mを検出した。幅1.8 m、深さ0.6～0.7 mである。溝内の堆積は大きく3層に分かれる。上

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
縄文時代～弥生時代	焼土痕、土坑、自然流路2条	
長岡京期	建物1A・1B・2、二条条間大路両側溝・内溝	溝から墨書木製品
中・近世	耕作溝群	

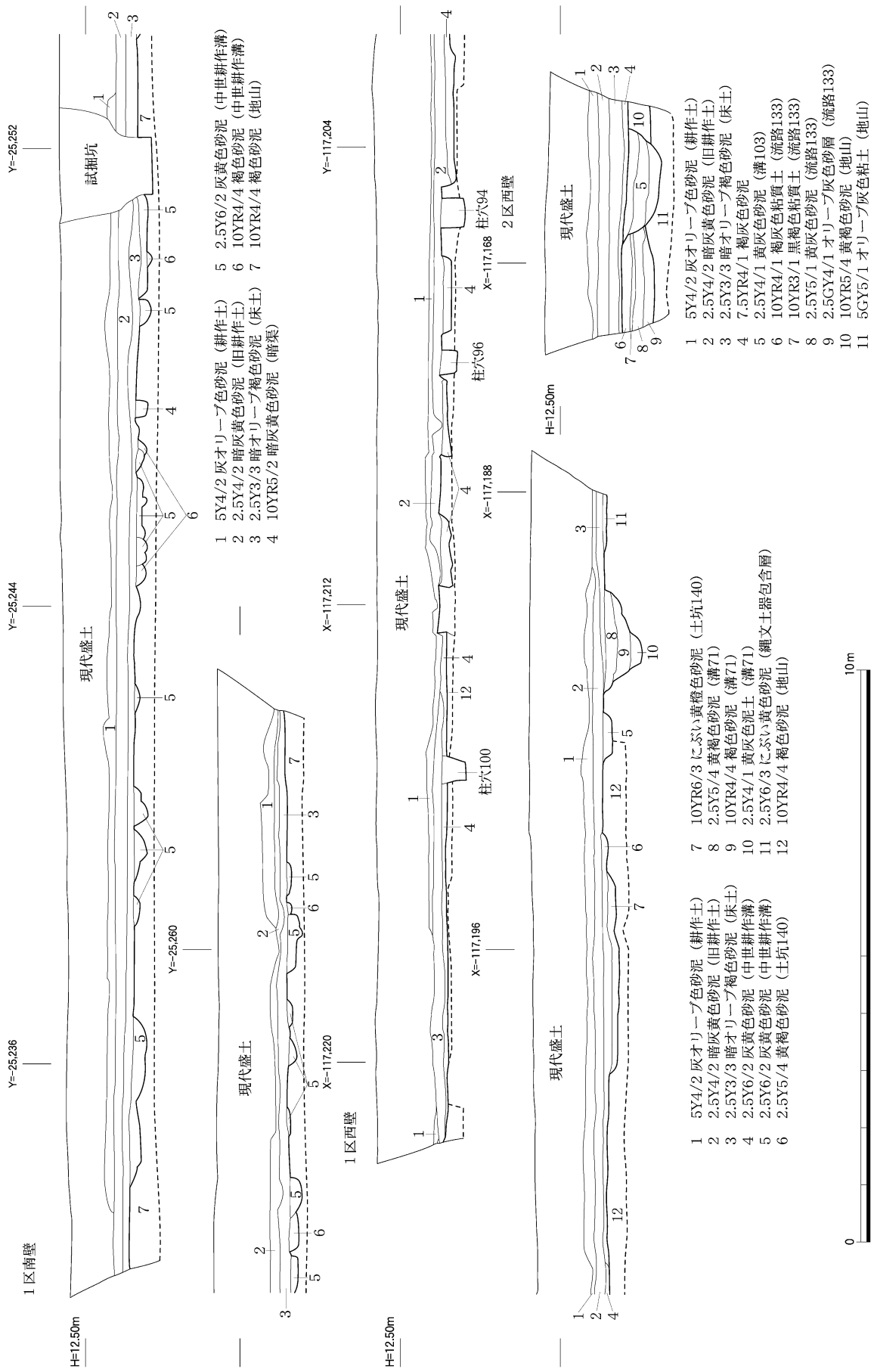


図5 調査区断面図 (1:100)

から 2.5Y5/4 黄褐色砂泥層、10YR4/4 褐色砂泥層、2.5Y4/1 黄灰色泥土層が堆積する。断面形状はレンズ状である。

溝 72 1区溝 71 に沿った東西方向の溝である。断続しながらも総延長約 13 m を検出した。幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.3 m である。溝の埋土は 2.5Y5/3 黄褐色砂泥層である。二条条間大路南側溝 71 の南肩から南に 3.4 ~ 3.6 m に位置し、六町内の内溝と考えられる。

柵 162 1区溝 71 に沿い、内溝 72 の西への延長で検出した東西方向の柵である。東西 3 間分を検出した。さらに調査区西外に延びると考えられる。柱間は東から 1.2 m、0.4 m である。柱穴はいずれも径 0.3 m のほぼ円形である。埋土は 2.5Y5/4 黄褐色砂泥層である。

建物 1 A・B (図 8・9、図版 5) 1 区の南半部で母屋が重複した庇の付く南北棟の掘立柱建物である。南北 3 間、東西 2 間の母屋を、ほぼ同位置で、同規模に建て替えられている。当初、平面では掘形の重複はみられず、母屋柱の断割り後に、各柱の下面で別の柱穴の痕跡を検出した。柱掘形は不明であるが、下面での柱列を建物 1 A とし、上面で検出した柱列を建物 1 B とした。建物 1 A が古く、1 B は新しい。

建物 1 A の母屋の柱間はいずれも 2.4 m 等間隔である。柱穴は径 0.1 ~ 0.2 m で、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。庇は北・東・西の三面に取り付く。庇の出は北・東が 1.9 m、西は 1.6 m である。柱穴は径 0.2 ~ 0.3 m である。庇を含む全体の規模は南北 9.1 m、東西 8.2 m である。建物の方位は座標軸の北に近い。二条条間大路南側溝 71 の南肩部から北庇までは 14 m を測る。

建物 1 B の母屋柱はいずれも一辺 0.5 ~ 0.6 m の隅丸方形の掘形をもつ。西・南の二面に庇が取り付く。西の庇の出は 3.1 m で、一辺 0.4 ~ 0.5 m の隅丸方形の掘形をもつ。南庇の出は 3.3 m で、

径 0.2 ~ 0.3 m の柱穴が残存する。全体の規模は南北 10.4 m、東西 7.9 m である。建物の方位は建物 1 A と同一である。二条条間大路南側溝 71 の南肩部から母屋北側までは 15.4 m を測る。

建物 2 (図 10、図版 5) 1 区の西端部南で検出した庇の付く南北棟の掘立柱建物である。母屋は南北 3 間、東西は 1 間分を検出したが、さらに調査区外の西に延びる。柱間はいずれも 2.4 m 間隔である。柱穴は一辺が 0.5 m の隅丸の方形掘形をもつ。庇は北に取り付く。庇の出は 2.4 m で、柱穴は長さ 0.8 m、幅 0.5 m の縦長の方形掘形をもつ。全体の規模は庇を含み南北 9.5 m、東西 2.4 m 以上である。建物の方位は建物 1 A・B と同一である。また、母屋の北・南柱筋が、建物 1 A・B の母屋の柱筋と揃う。二条条間大路南側溝 71 の南肩部から北庇までは 13.2 m を測る。また、建

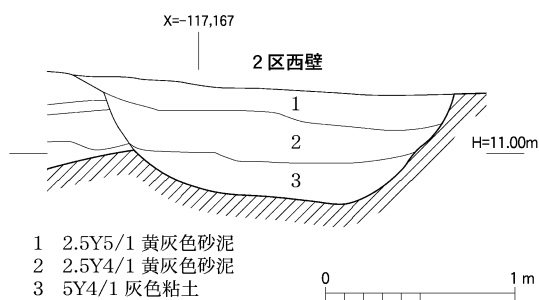


図 6 2区溝 103 断面図 (1:40)

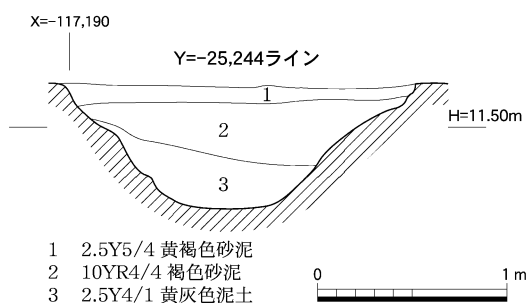
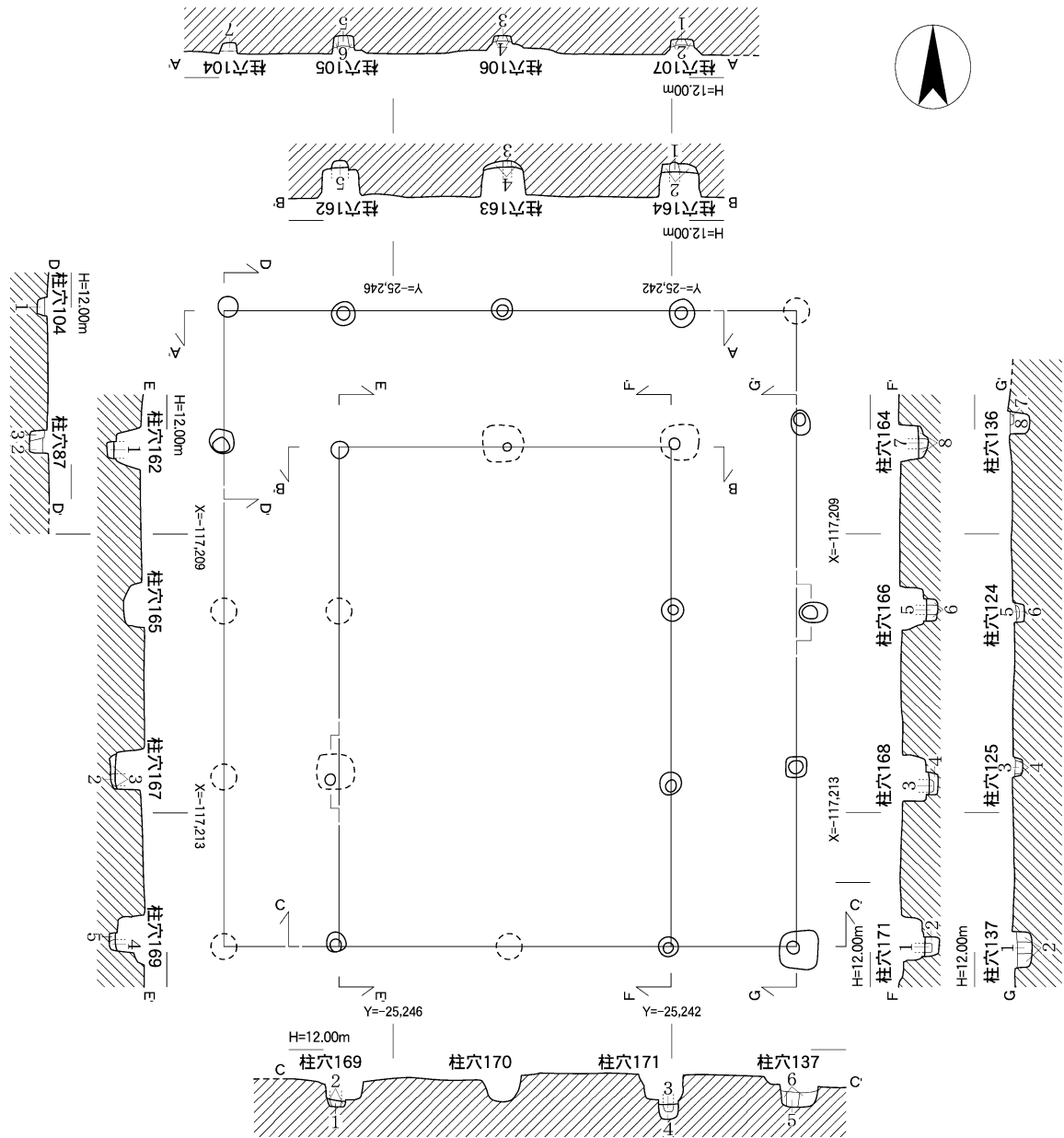


図 7 1区溝 71 断面図 (1:40)



- | | | |
|---|---|---|
| <p>A-A'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴107 1 2.5Y6/2 灰黄色シルト 2 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 柱穴106 3 2.5Y6/2 灰黄色シルト 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 柱穴105 5 2.5Y6/2 灰黄色シルト 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 柱穴104 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | <p>C-C'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴169 1 2.5Y6/1 黄灰色砂泥 2 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 柱穴171 3 10YR6/1 灰色砂泥 4 5Y6/1 灰色砂泥 柱穴137 5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 6 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 | <p>F-F'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴171 1 10YR6/1 灰色砂泥 2 5YR6/1 灰色砂泥 柱穴168 3 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 4 10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥 柱穴166 5 2.5Y6/3 にぶい黄色砂泥 6 2.5Y6/2 灰黄色砂泥 柱穴164 7 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 8 5Y6/1 灰色砂泥 |
| <p>B-B'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴164 1 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 2 5Y6/1 灰色砂泥 柱穴163 3 5Y7/1 灰白色砂泥 4 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 柱穴162 5 5Y6/1 灰色砂泥 | <p>D-D'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴104 1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 柱穴87 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 3 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | <p>G-G'</p> <ul style="list-style-type: none"> 柱穴137 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 2 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥 柱穴125 3 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 柱穴124 5 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 6 10YR4/4 褐色砂泥 柱穴136 7 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 8 10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥 |

図8 1区建物1A実測図(1:100)

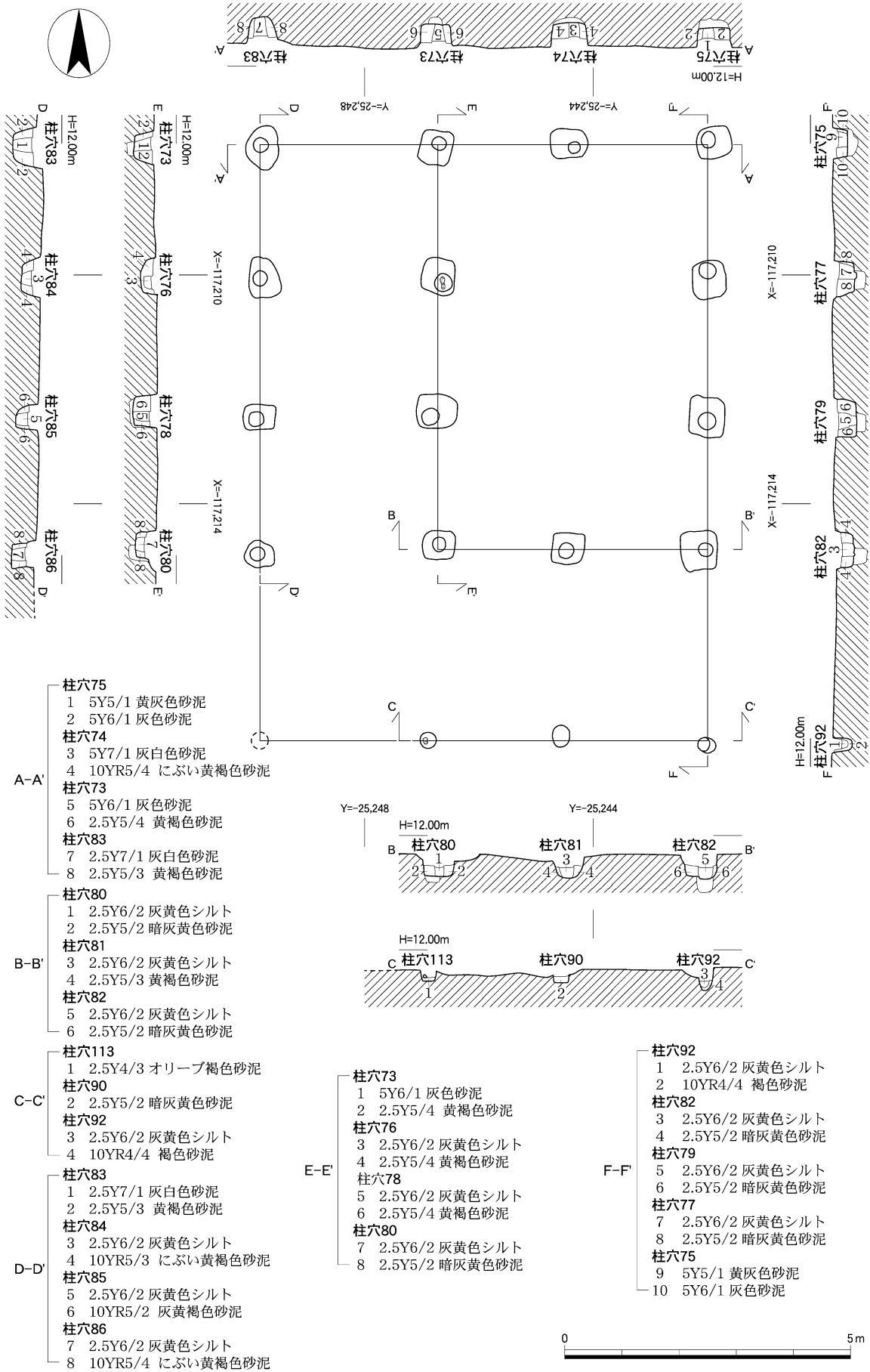


図9 1区建物1B実測図(1:100)

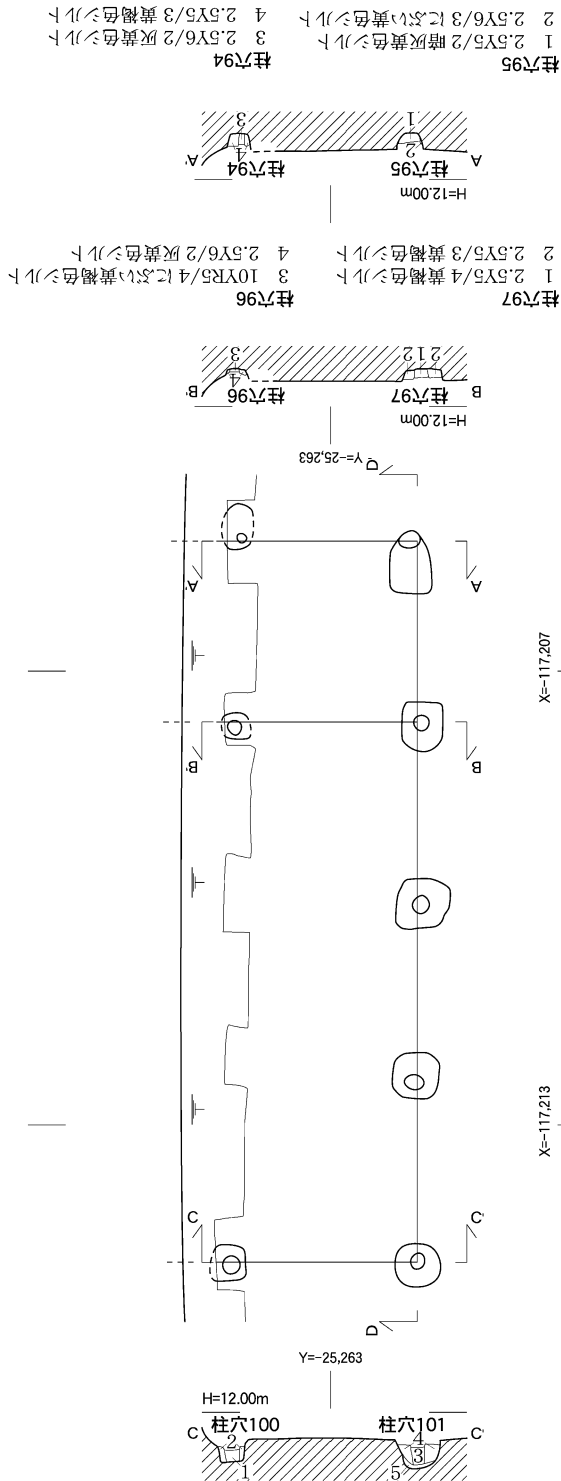


図 10 1区建物2実測図 (1 : 100)

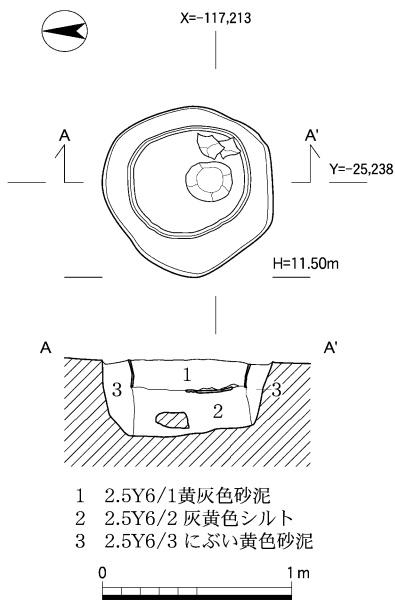


図 11 1区土坑 153 実測図 (1 :

連する遺構とみられる。

物 1 B の西庇からは 12 m 離れている。

土坑 153 (図 11) 建物 1 A の東庇から東 2 m に位置する。径 0.9 m のほぼ円形で、深さ 0.4 m である。内径 0.6 m、高さ 0.4 m 以上の曲物を据え、内に土師器皿 2 枚が上向きに置かれていた。下層には扁平な石も出土している。曲物内の埋土は 2 層に分かれる。上層は 2.5Y6/1 黄灰色砂泥、下層は 2.5Y6/3 灰黄色シルトである。掘形は 2.5Y6/3 にぶい黄色砂泥である。

土坑 140 北西部で検出した掘り込みである。東西 10 m 以上、南北は幅 5 m 以上で、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。平面では輪郭は不明確な部分が多いが、西壁の断面からは地山を掘り込んでいる状態が読みとれる。埋土は上層が 2.5Y5/4 黄褐色砂泥、下層は 10YR6/3 にぶい黄褐色砂泥である。二条間大路南側溝 71 の南肩から 2 m にあたり、築地造作に關

(4) 第 2 面 長岡京期以前の遺構 (図版 3・8)

焼土痕 156・157・159 (図 12、図版 8) 1 区北西隅にみられた縄文土器を含む、2.5Y6/3 にぶい黄褐色砂泥層の直下で検出した、火熱を受け赤色系に変色した痕跡である。156 はにぶい赤褐色を呈し、長辺 0.8 m、短辺 0.7 m、厚さ 0.1 m である。157 の上半部は溝 71 に切られており、残存規模は長辺 0.8 m、短辺 0.7 m。厚さ 0.2 m である。上面には炭化種実がみられた。159 は長辺 1.0 m、短辺 0.7 m。厚さ 0.1 m である。

流路 120 (図 13、図版 7) 1 区北半部東で検出した北西から南東に向かって流れる流路である。総長約 24 m 検出した。幅 1.8 ~ 2.5 m、深さ 0.3 ~ 0.5 m である。堆積土は大きく 3 層に分けら

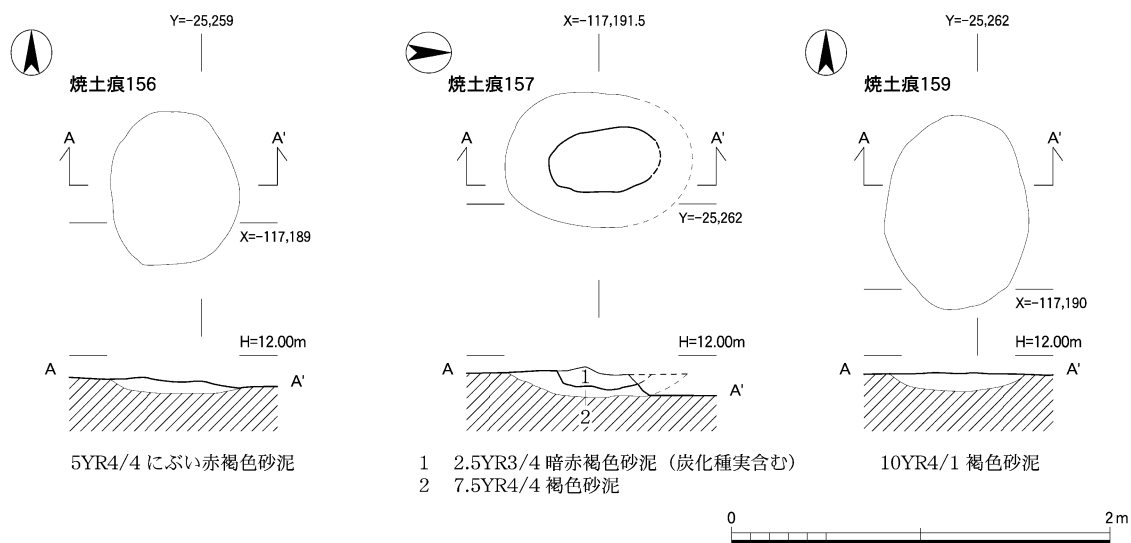
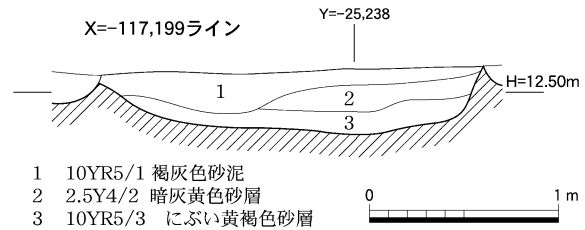


図 12 1区焼土痕 156・157・159 実測図 (1 : 40)

れる。上層は 10YR5/1 褐灰色砂泥層、中層は 2.5Y4/2 暗灰黄色砂層、下層は 10YR5/3 にぶい黄褐色砂層である。

流路 133 2区で検出した北西から南東に向かって流れる流路の北肩部である。総延長約 4 m 検出した。幅 2 m 以上、深さ 0.7 m である。



- 1 10YR5/1 褐灰色砂泥
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色砂層
- 3 10YR5/3 にぶい黄褐色砂層

図 13 1区流路 120 断面図 (1:40)

堆積土は大きく 3層に分けられる。上層は 10YR4/1 褐灰色粘土で、下位には腐植土がみられる。中層は 2.5Y5/1 黄灰色砂泥、下層は 2.5GY 5/1 オリーブ灰色砂層である。

土坑 141 1区北半部の西で検出した。幅 0.6 m、長さ 0.4 m、深さ 0.5 m である。埋土は 10YR 4/4 褐色砂泥層で、層内から縄文土器片が出土した。

4. 遺物

出土遺物は整理箱に 12 箱である。長岡京期のものが大半を占める。他の時期の遺物は中世と弥生時代、縄文時代のものがある。弥生時代は弥生土器の細片が 1 区流路 120 から少量出土している。出土遺物は土器類が大半で、瓦類は少ない。石器も数点ある。木製品では表面に墨書された箱蓋が完形で出土している。

(1) 縄文時代の遺物 (図 14、図版 9)

縄文時代後期の縄文土器と石器がある。縄文土器は細片が多いため、図示できる資料が少ない。ほとんどが 1 区の北西隅の包含層から出土した。縄文土器以外では磨石、石皿、石鏃、剥片などが 1 区の北西隅の包含層と溝 71 の肩部から出土している。

縄文土器 (1~3) 1・2 は口縁部の破片である。いずれも口縁部が外反し、端部は肥厚する。外面には幅広の沈線が口縁部下を巡る。体部には縦・横・斜めに幅広の沈線で文様が描かれている。胎土には砂粒が多く含まれ、色調は黒褐色である。同一の深鉢の破片とみられる。3 は体部の破片とみられる。ほぼ全面に縄文が施されている。胎土には砂粒が多く含まれ、色調は褐色である。

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代 ~弥生時代	縄文土器、石器、弥生土器	1箱	縄文土器 3点、石器 3点	1箱	0箱
長岡京期	土師器、須恵器、木製品	2箱	土師器 3点、須恵器 3点、木製品 1点	1箱	0箱
中・近世	土師器、瓦器、輸入陶磁器	9箱	瓦器 2点	1箱	8箱
合計		12箱	15点 (1箱)	3箱	8箱

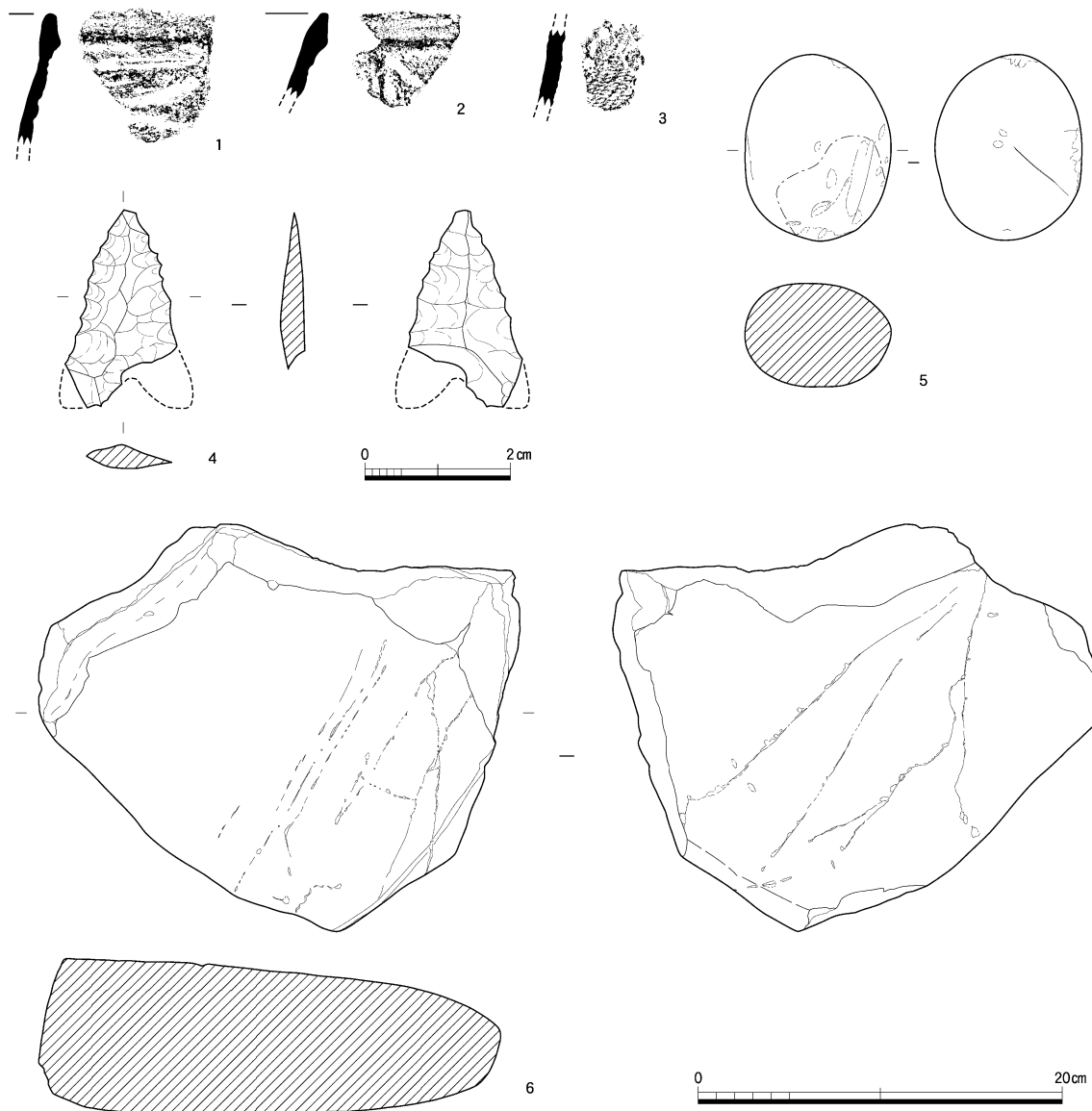


図14 出土遺物実測図1 (1:4、4のみ1:1)

1・2は口縁部が肥厚し文様を施す縁帯文土器を特徴とする、縄文時代後期前葉の北白川上層式¹⁾に比定される。

石鎌(4) 全長2.6 cm。基部が破損しているが、凹基無茎鎌のタイプとみられる。石材はサヌカイトである。

磨石(5) 長さ10.2 cm、幅8 cmの楕円形。磨き痕がほぼ全面にみられる。片面には鉄分と炭が付着する部分がみられる。石材は砂岩である。

石皿(6) 長さ25 cm以上、幅20 cm以上、厚さ8.5 cmの大型の石材であるが、破損しているため形状は不明である。片面は平坦で研磨したような使用痕跡がみられる。材質は砂岩である。磨石(5)と隣接して出土しており、また石材は同じ砂岩であることからセットで使用されたとみられる。

(2) 長岡京期の遺物 (図 15・16、図版 9)

出土した遺物は土師器、須恵器、木製品、獣骨、貝殻、種子などがある。土師器は碗・皿・高杯・甕などがみられる。須恵器は杯・壺・甕などがある。木製品には曲物と箱蓋がある。箱蓋は表面には墨書がみられる。また溝 103 からは馬の骨・歯、牛の骨、また貝殻には鮑が出土している。掲載した遺物は 1 区溝 71・土坑 153、2 区溝 103 から出土した。長岡京期の土器型式については「古代の土器 1 都城の土器集成」²⁾ に準拠した。

土師器皿 C (7) 口径 9.7 cm、高さ 1.9 cm を測る。口縁部は横ナデを施し、端部は丸く収める。在地系とみられる。1 区土坑 153 から出土した。

土師器杯 A (8) 口径 18.7 cm、高さ 3.4 cm を測る。口縁部外面の上端に横ナデを施し、体部外面は密にヘラケズリで調整している。河内系の特徴をもつ。1 区土坑 153 から土師器皿 C (7) とセットで出土した。

土師器杯 A (9) 口径 18.6 cm、高さ 4.4 cm である。外面は全面を丁寧にヘラケズリを施し、口縁端部は横ナデで調整している。1 区溝 71 から出土した。

須恵器杯 A (10) 口径 11.2 cm、高さ 3.2 cm である。外面は器壁が薄く、体部は外上方に直線的に延び、端部は丸く収める。1 区溝 71 から出土した。

須恵器杯 B (11) 口径 13.0 cm、高さ 4.8 cm である。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。外面は横ナデにより調整している。1 区溝 71 から出土した。

須恵器短頸壺 (12) 口径 10.2 cm、高さ 16 cm である。口縁端部は外反気味で丸く収める。1 区

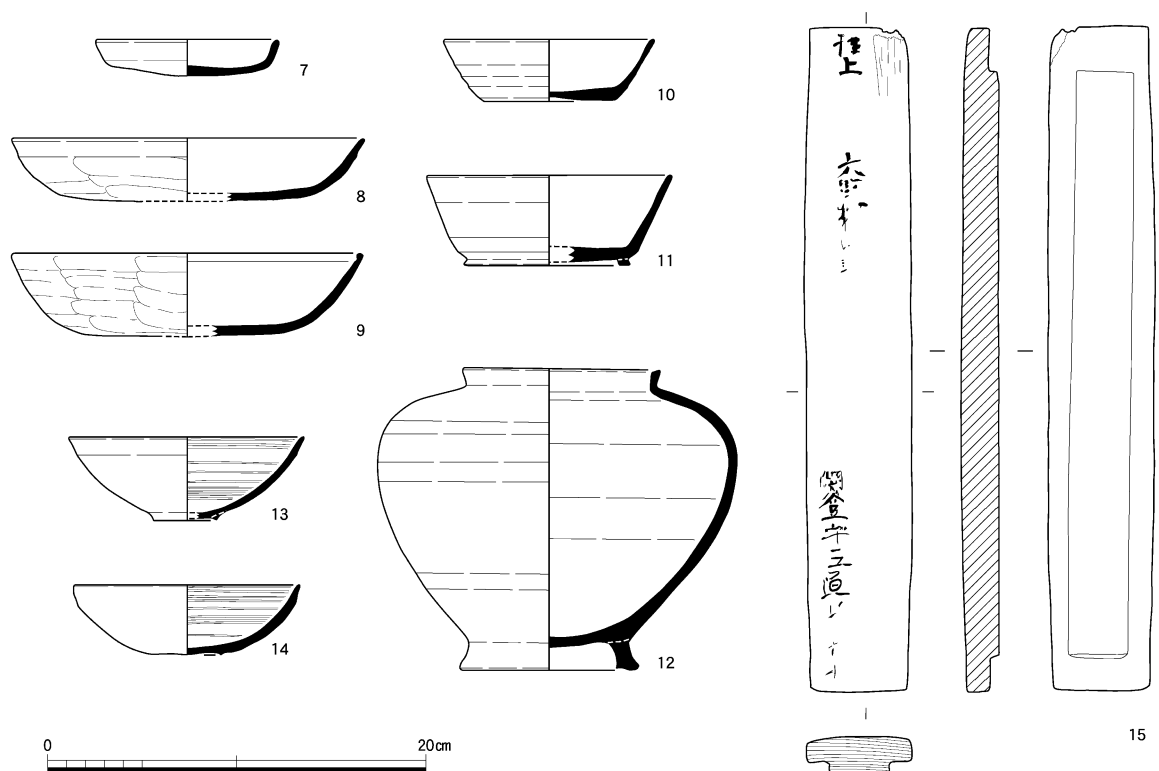


図 15 出土遺物実測図 2 (1 : 4)

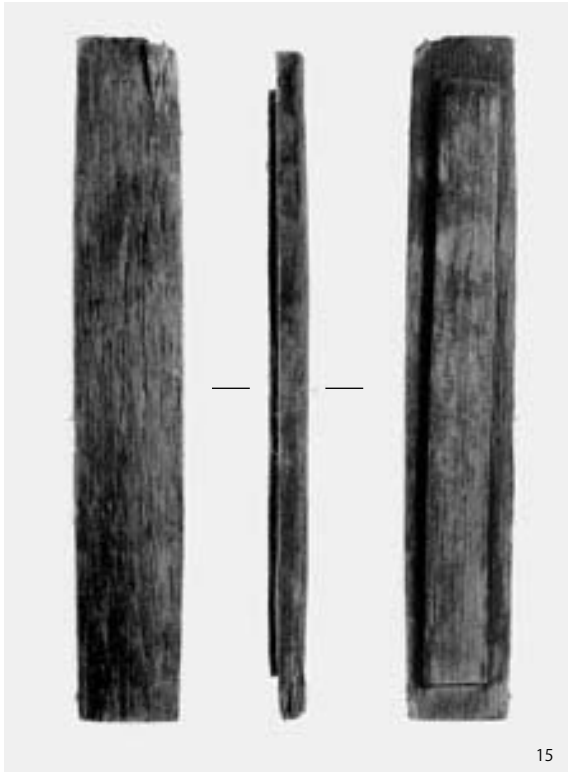


図 16 二条条間大路北側溝 103 出土木製品

溝 71 から出土した。

木製品 (15) 2 区の二条条間大路北側溝 103 から出土した完形の箱蓋である。長さ 35.15 cm、幅 5.0 cm、厚さ 2.0 cm を測る。文書を入れるための箱蓋とみられる。蓋の表面はやや甲盛となり、「謹上 大□□□ □□□□□ □□□」^{登カ} ^{三カ原カ}と墨書がみられる。謹上は正倉院文書の書状の上所にしばしば見られる文言である。箱の蓋に書状末尾の上所・充所などを、そのまま書き付けたと推定される。「大□□□」は充所であろう。左下の□□□□□^{登カ} ^{三カ原カ}は差出所で、左寄せの細字□□□は差出所の下附の可能性もある。裏面は周縁部を削って、中央部を突出させ、箱身を嵌め込むようになっている。中央部の断面は「T」字形である。裏面凸部は長さ 25.9 cm、幅 3 cm、厚さ 0.5 cm を測る。樹種はヒノキである。木製

箱蓋の出土例は平城京・長屋王邸の調査で箱身とセットで出土している³⁾。

(3) 中世の遺物 (図 15、図版 9)

出土した遺物は土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器などの土器類である。多くが細片で耕作溝から出土しているが、14 世紀代とみられる比較的残りが良い瓦器碗が、1 区溝 4・9 から出土している。

瓦器碗 (13) 口径 12.5 cm、高さ 4.4 cm を測る。体部内面のへら磨きは粗く、器壁は薄い。高台も低い。口縁部内側には沈線が不明瞭ではあるがみられる。楠葉産である。1 区溝 9 から出土した。

瓦器碗 (14) 口径 12 cm、高さ 3.7 cm を測る。体部内面のへら磨きが粗く、高台はわずかにみられる。口縁部内側には沈線は施されない。産地は不明である。1 区溝 4 から出土した。

註

- 1) 『先史時代の北白川 京都大学文学部博物館図録第 4 冊』京都大学埋蔵文化財センター 1991 年
- 2) 古代の土器研究会編『古代の土器 1 都城の土器集成』1992 年
- 3) 『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 奈良国立文化財研究所学報 第 54 冊』奈良国立文化財研究所 1995 年

5. ま と め

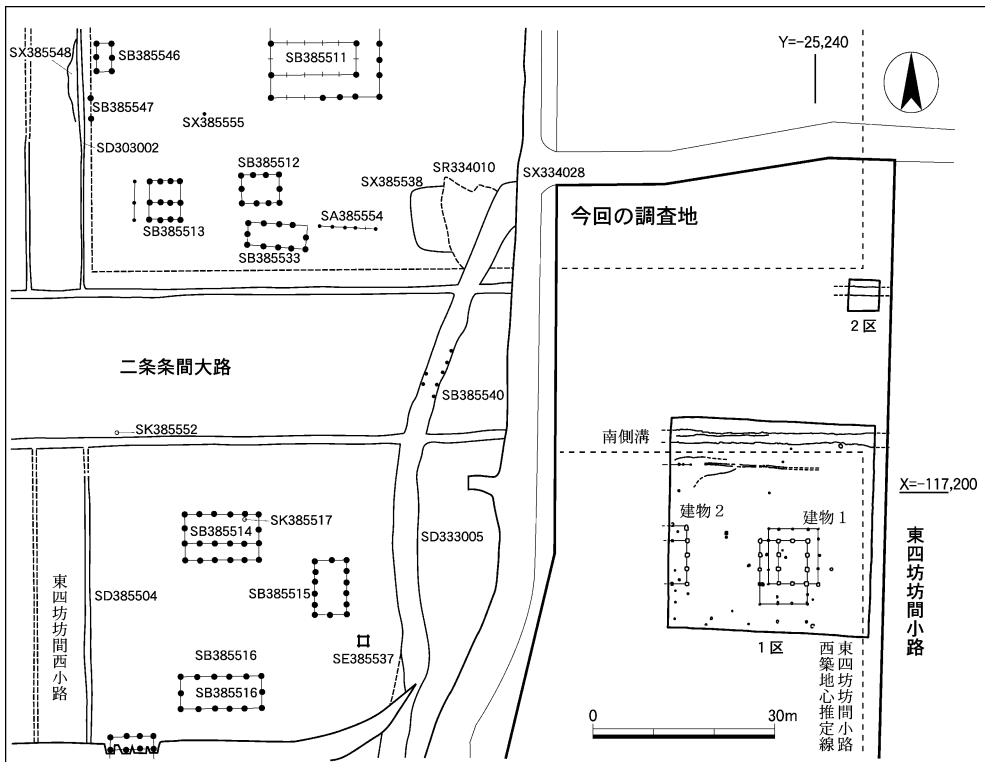
今回の調査では、中世の耕作溝群を検出し、長岡京廃都後の土地区画や耕作単位的一端が明らかになった。長岡京期については、左京二条四坊六町内の宅地内での掘立柱建物3棟の検出や、二条条間大路両側溝と内溝の検出により、同町内の北東部での宅地利用の実態と条坊路の施行状況を知り得た。東土川遺跡に関連する遺構は、弥生時代の流路2条、縄文時代後期の焼土痕や土坑を検出し、当調査地での長岡京造営以前の様相が明らかになった。それらの成果を西隣接地の京都府埋文センターの発掘調査事例と照合し、長岡京期では二条条間大路や建物配置、長岡京期以前は流路跡の状況などについて、以下に要約しておく。

中世(図版1)乙訓地域は長岡京廃都後、平安時代には条里地割りが施行され平安京近郊の公営田として耕作地化が進行する。調査地は九条村田里31坪と32坪の推定地で、検出した南北方向の多数の耕作溝は長地型の耕作単位を示唆している。溝は幾度も掘削されているが、溝内からは14世紀代の瓦器碗や輸入陶磁器などが出土していることから、中世以降も耕作地となり、土地区画が踏襲され現在に至ったものとみられる。

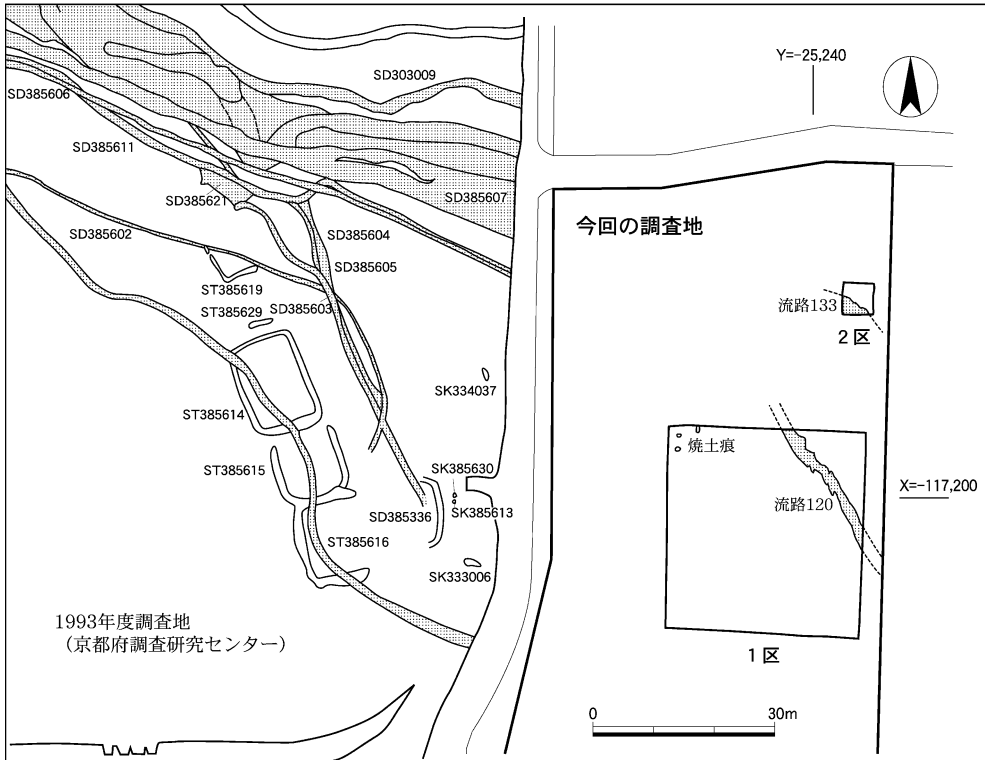
長岡京期(図17-1)条坊遺構については、二条条間大路の両側溝を検出し、路幅は両側溝心々で24mを測り、また、当大路が四坊六・七町までは施行されていたことが判明した。東四坊坊間小路については、築地の痕跡や区画を示す遺構は検出できなかった。後世の削平を受け消失したのか、本来設置されていなかったのかは、今後の検討課題である。調査区外の当小路の西側溝推定地にあたる東接地には、南北方向の用水路がみられ、現在まで踏襲している事例として興味深い。

宅地については六町内で築地に伴う内溝や柵を検出し、その南で南北棟の建物3棟を検出した。建物1A・Bは新旧がみられ、母屋は建て替えてはいるが、ほぼ同位置で庇を北・西・東の三面庇から西・南の二面庇としている。建て替えの理由は不明であるが、ほぼ同位置に存続させた建物1A・Bの配置の重要性が窺われる。建物2は調査区西外に延び規模は不明であるが、建物柱筋が揃うことや、方位の同一性と、柱掘形の規模や形状などの類似性から、建物1と同基準で計画的に配置された一群と考えられる。六町の宅地内を、西隣接地の京都府埋文センターの調査成果とつなぎ合わせると、同町内での宅地利用は、東西を2分割する水路が南北に貫流しており、2分の1町規模で分割されていたとみられる。これまでの調査成果によると、二条条間大路沿いの宅地利用は1町あるいは2分の1町規模であり、それより小分割はみられない。この大路沿いは宮城の東面街区として、宅地内を小分割しない階級の宅地や、宮外の役所などによって形成された¹⁾としており、今回検出した建物も、それらに属するものと考えられる。

出土遺物については、二条条間大路両側溝や建物1西接地の土坑153から出土した土器類や木製品がある。南側溝からは長岡京期の特徴的な土師器杯、須恵器杯などが出土している。土坑153からは在地系の土師器皿Cや河内系の土師器皿が曲物と伴に出土している。土坑153は近接する建物1Aの解体時、あるいは建て替えに際しての地鎮にかかわる遺構の可能性が高い。二条条間大路北側溝から出土した木製の墨書箱蓋は、土器とともに投棄されたと推測される。北側の七町は、調査事例から大・小規模の建物配置により、1町規模で占有されていたと考えられている。



1. 長岡京期



2. 長岡京期前

図 17 長岡京期および以前の遺構概略図 (1 : 1,250)

箱蓋は宅地の建物の性格や所有者あるいは関係者を知る上で貴重な一資料である。

長岡京期以前（図 17- 2）東土川遺跡では、これまでに古墳時代の集落跡や弥生時代の方形周溝墓群、流路や溝跡などが検出されている。遺構群はいずれも標高 13 ～ 15 m に立地している。それらの地域からは、今回の調査地はその縁辺部にあたる。今回検出した北西から南東方向の流路 120・133 は、位置関係や堆積土などから、西隣接地での京都府埋文センターの調査で検出された幅約 10 m の流路の支流とみられる。この流路は弥生時代後期から古墳時代後期まで流れていたとされている。1 区と 2 区間でも、当調査地の周囲側溝工事に伴う立会調査²⁾で、同方向の流路跡を確認しており、支流が幾筋も流れていたことが判明した。また、東側の田・畑では、流路 120 に繋がる南東方向に蛇行して流れる自然流路が、用水路として現在も利用されており、旧流路の痕跡が想定できる事例として重要である。

縄文時代後期の焼土痕と土器や石器については、当調査地から北東約 500 m 離れた京都府埋文センターの調査³⁾でも、縄文時代後期の焼土痕や土坑が検出され、土器や石器も多く出土している。遺構は標高 11 m 前後のやや微高地で検出されており、今回の調査地の標高や、地形に類似している。さらに縄文時代後期の包含層直下で、焼土痕や土坑が検出されている点についても、同様の類似点がみられる。両調査地の間には、幅約 10 m の旧流路が北西から南東に流れ、面的には断絶しているが、東土川遺跡での縄文時代の遺構の分布状況や遺跡の動向を考える上では、重要な成果となった。

註

- 1) 『京都府遺跡調査報告書 第 28 冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000 年
- 2) ト田健司「長岡京左京二条四坊七町跡（08NG65・150）」『京都市内遺跡立会調査報告』平成 20 年度 京都市文化市民局 2009 年
- 3) 『京都府遺跡調査概報 第 61 冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995 年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうさきょうにじょうしぼうろく・ななちょうあと							
書名	長岡京左京二条四坊六・七町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-13							
編著者名	加納敬二・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くぜひがしつちかわちょう 久世東土川町	26100		34度 56分 36秒	135度 43分 25秒	2008年8月 4日～2008 年10月10日	1,200㎡	倉庫建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡	都城跡	縄文時代 ～弥生時代	流路、焼土痕、土 坑	縄文土器、石器				
		長岡京期	二条条間大路南北 側溝および内溝、 掘立柱建物など	土師器、須恵器、木製 箱蓋、獣骨		箱蓋に墨書あり		
		中・近世	耕作溝群	土師器、瓦器、輸入陶 磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-13
長岡京左京二条四坊六・七町跡

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961